

## 「ハイデルベルク・ストラスブル派遣 参加報告書」

京都大学文学研究科修士1年 吉田絵弥

ハイデルベルク大学アジア・ヨーロッパ研究クラスターについて、職員の方に聞かせていただいた話（報告者の報告担当部分）を中心に報告する。

クラスターを訪問し、まず建物のツアーに参加した。会議室、研究室、オフィスを訪問したが、どこも新しくきれいだった。その後、クラスターに関する詳しい説明を聞いた。クラスターは、2007年に設立されて、国際連携・若手研究者の養成・学際研究といった目的をもっている。4つのリサーチ・エリア（RA）があり、(A)Governance & Administration、(B)Public Spheres、(C)Knowledge Systems、(D)Historicities & Heritage となっている。学生はこのいずれかに所属する。

説明の後、クラスターのコーディネーター（職員）の方にお話を聞かせていただく機会があった。その方は以前はクラスターの博士課程に在籍していて、現在は教員ならびに学生のための Study Program のコーディネートを担当している。学生に対しては、研究・勉強の計画や単位の取り方に関する相談業務を行っている。

まず、ハイデルベルク大学での学生生活について聞いた。学生が住むのはアパート、学生寮、シェアハウスなどで、物価の高さから学生寮が人気だ。ハイデルベルクは外国人と学生が多く、ベルリンなど大都市と比べると街が小さいため、留学生にとって慣れやすく住みやすい街である。また、ヨーロッパの中心に位置し、フランクフルト国際空港まで1時間ほどであるため、国内・国外へのアクセスもいい。

1セメスターに受講する授業は4~5クラス程で、数は多くないが、授業外の課題が多く、また term paper（学期レポート）も書かなければならないので、毎日勉強で忙しい。さらに同時に研究を自主的に進めることになる。クラスターではほとんどの学生が真剣に学問に取り組んでいる。

クラスターは学際的で研究分野も多様である。報告者の専門が社会学のため、フィールドワークなど経験的研究についてはどうかとたずねたが、経験的研究については教授・学生ともに少ないそうだ。二次資料を収集して分析するということはあるが、自分でフィールドに行き調査をしている人はあまりいないとのことだった。

また、留学生がドイツ語を学ぶことはできるか聞いた。クラスターの授業は英語で行われるため、自動的にドイツ語を学べるわけではなく、自主的に取り組む必要がある。しかし、ドイツ語の授業を受講したり、日常生活でドイツ語を使用するなど、学ぶ機会は多いという。

訪問では、コーディネーターの方以外に、クラスターに在籍する学生とも交流した。ドイツ出身、ウクライナ出身、中国出身、トルコ系ドイツ人など、学生の国籍や背景はさまざま、クラスターではグローバルな視野をもって勉強・研究に取り組むことができる。報告者は学部生の頃からドイツ語とドイツ社会に関する勉強を続けており、ドイツへの留学を希望しているため、今回の派遣でハイデルベルク大学について詳しく知ることができたことは自身にとって大変有意義だった。また、交流を通じて、ハイデルベルク大学の学生や職員の方に、京都大学について伝えることもできた。その他、社会や生活一般について話す機会もあり勉強になった。

今後も報告会、留学生のサポート、留学などを通じて、京都大学とハイデルベルク大学の関係のために役に立てたらと思います。今回はこのような貴重な機会をいただきありがとうございました。

## 「ハイデルベルク・ストラスブール派遣 参加報告書」

京都大学文学研究科修士2年 横田 悠矢

今回のハイデルベルク、ストラスブール両大学の訪問では、施設見学および現地の学生たちとの交流を通じて、それぞれの大学で日本学を学ぶための制度、および学生たちの意識に対する理解が深まった。なおハイデルベルク大学については他の報告書に譲るものとし、ここではストラスブール大学について言及する。

ストラスブール大学の施設については、日本語学科のある“Patio”に加えて、法学、化学、植物学、物理学、神学、哲学等の講義棟を、現地のシャール先生ご案内のもと見学した。また国立図書館“Bibliothèque nationale et universitaire”を訪れ、職員の方から設立の経緯や蔵書の特徴などについて伺った。

ストラスブール大学博士前期過程の学生たちとの交流は、彼らの研究活動や日本語学科の仕組みについて詳しく知る機会となった。学生たちの研究テーマは、妖怪、将軍の鷹狩、大正期のフェミニズム運動など多岐にわたり、日本に関する主題であれば幅広く受け入れられるという印象を得た。博士前期課程のうちに一年間日本へ留学する学生が多いという点にも、彼らの意識の高さを窺うことができる。ちなみに学部は他言語と日本語を並行して学ぶコース（LEA）と、日本語のみに集中するコース（LLCE）に分かれるが、3年間で博士前期過程に進学することができるのは後者のみであり、彼らの高い語学能力が学部時代から着実に培われたものであることも興味深かった。講義以外にも、意欲ある学生は“Spiral”という、ランゲージ・エクスチェンジのパートナーを見つけるためのシステムを活用し、交換留学生など現地に住む日本人と積極的に交流している。

報告者は2011年から2012年にかけてストラスブール大学へ一年間の交換留学を行ったが、当時交流を深めたフランス人学生たちは往々にして学部生であり、日本語学科の研究室を訪れたり、博士課程の学生と互いの研究について話したりすることはなかった。短い滞在ではあったが、今回の派遣では日本についてより専門性の高い内容を学ぶフランスの学生たちと交流でき、日本でフランス文学を学ぶ自身にとって大きな刺激となった。また今回は日本学を学ぶ学生との交流ということもあり、日本語を話す機会が想像以上に多かったが、これはむしろ自身がさらに外国語を（あるいは外国語で）学ぶ動機を高めるものとなった。報告者は以前から博士後期課程でのフランスへの長期留学を検討しており、この派遣プログラムを経ていっそう意欲が高まった。ハイデルベルク、ストラスブール両大学とのさらなる連携強化のためには、日本人学生への情報提供や動機付け、また単位互換制度などさまざまな課題があると思われるが、今回の派遣が一助となれば幸いである。

## 「ハイデルベルク・ストラスブール派遣 参加報告書」

京都大学文学研究科修士二回生 横井啓人

今回のハイデルベルク・ストラスブール大学の訪問は、私にとって貴重な経験となりました。今回のプログラムの報告につきましては、派遣された学生間の相談の上、それぞれ担当するテーマについて報告する運びとなり、私はハイデルベルク大学の日本語学部（クラスター）を中心に、欧州における日本研究も考慮しながら論じようと思います。

まずハイデルベルク大学日本語学部に訪問した際に、私たちは当学科の図書館に赴きました。図書館には日本の文献や書籍が数多く収蔵されていて、歴史系を中心に人文系が多い印象を受けました。しかし日本史系の書籍は、近世以降主に近代のものがほとんどで、学術専門書について言えば近代の書籍が圧倒的でした。一方で、日本の古代中世の書籍ですが、概説書はありましたが学術専門書はほぼ無く、日本の古代中世については学術的な需要や研究がほぼ存在しないとの事です。ドイツや欧州が日本と関係を持つようになった近世・近代以降の日本史学が研究対象になり易いのは自明の事で、自身の研究分野である日本古代史の研究が欧州で行われる素地は、限りなく少ない事を痛感せざるを得ません。

その後当学科の先生・生徒の方と会話する機会を得ました。それによると、ドイツに限らず海外における「日本」のイメージはサブカルチャー的なものが目立ち、日本語学科にはそのサブカルチャーに興味を引かれて入学する学生が多いとのことです。一方で、福島原発の事故や、それに影響を受けたドイツの脱原発の政策に興味を持ち日本語学科に入る学生も増えてきているようです。要するに、当大学で日本を研究する場合は、その視点がサブカルチャーや原発など、特定の課題やドイツ社会と関係のあるものに集中しやすい傾向があり、政治や経済など様々な分野に研究が発展していかない現状が見てとれます。

一方で当大学におけるアジア研究の主眼は、徐々に日本から中国へシフトしていると先生は指摘していました。詳しく比較すると、ハイデルベルク大学の日本語学科の講師陣は3人（内2人日本人）で学生数は400人、一方で中国語学科は教授が8人で学生が300人です。学生数で日本語学科は郵政、実際その潜在性・発展性は中国語学科に言わざると得ません。先述したように、日本語学を学ぶ学生はサブカルチャーなど特定の分野偏っている傾向があるのに対し、中国語学は文化のみならず政治・経済など幅広い分野の教授陣を揃え、中国という近年成長を遂げる国家を多角的に分析する準備が整いつつあります。

つまり以上の結果から、交流先の大学特にハイデルベルク大学における日本研究は、次第にその重要性を後退せざるを得ないかと危惧するに至りました。ドイツと近年経済面で関係を強化し発展を遂げる中国に、アジア・ヨーロッパ間の研究の視座が向きつつあります。この点も踏まえつつ、本研究科とハイデルベルク大学の交流強化は迅速かつ強固に推進し、欧州における日本研究の分野の幅を広げてその研究状況を発展させるべきと考えます。

## 「ハイデルベルク・ストラスブール派遣 参加報告書」

京都大学文学研究科博士課程2年 八坂哲弘

京都大学ジャパングートウェイ構想の一環において、国際共同学位プログラムの現地調査のため、ハイデルベルク大学・ストラスブール大学を訪問し、現地の教授や学生と交流を行った。

日本の学生がハイデルベルク大学・ストラスブール大学に留学した場合、どのような学習環境に身を置くことになるかを調査する為に、大学や大学図書館、周辺の移住環境を実地に視察し、また現地の学生との交流を行うことによって、彼らの学習環境について、また学生生活についての話を伺うことができた。ハイデルベルク大学・ストラスブール大学、共に優れた学習環境を有しており、留学先として優れた大学であることを実感した。

また、ハイデルベルク大学・ストラスブール大学の学生の日本学部を訪問し、日本に関心を持ち日本への留学の意志を持つ学生達と交流を行った。まず、驚いたことにはハイデルベルク大学日本学部には三百名もの生徒が在籍しているとのことであり、日本への高い関心がうかがわれた。そして、今回の交流において分かったこととして、彼らが日本に関心を持つきっかけとして、漫画やアニメの占める位置が非常に大きいということがある。また、漫画・アニメに限らず、日本の音楽、近代文学なども同様にきっかけとなるようである。総じて言えることは、日本のポップカルチャーへの関心というものの占める割合が大きいということであり、それは無視できるものではないと思われた。とは言え、それらの関心はステレオタイプな現代の日本像に対するものであり、例えばハイデルベルクの日本学部では、そのような日本像に対し、現実の日本のあり方を教育することにも力を入れているようであった。また、日本学部のカリキュラムは主に日本語の習得に力点が置かれており、ハイデルベルク大学の日本学部においては週に30時間ほど日本語の講座を受けるとのことである。ストラスブール大学の日本学科では、日本への留学が義務づけられており、同様に日本語の習得に力を入れていることが窺われた。彼らのカリキュラムの力点が日本語の習得にある為、実際に両大学の学生が日本に留学し、専門的な日本の研究を行うにあたっての、京都大学のバックアップの必要性が感じられた。その為、京都大学ジャパングートウェイ構想による受け入れ態勢の整備は非常に有意義かつ必要性の高いものであることは疑い得ない。

最後に、今回の派遣プログラムに参加しての具体的な感想を述べておきたい。私の専攻する日本哲学史は現在世界的に関心を集め始めている。日本の哲学の更なる国際化を目指すにあたって、海外の研究者の増加は必須の課題である。今回、実際に日本学部を訪問することによって、ヨーロッパにおける日本への関心の高さを窺い知ることができたことは非常に有意義であった。また、私自身ハイデルベルク大学・ストラスブール大学の学習環境に大変な魅力を感じ、留学への意志が深まった。

今回このような有意義な機会を得ることが出来たのは KUASU 支援室のご尽力によるものであり、大変有り難く感じている。今回渡航していない他の研究者達にもこのような機会を体験してほしいと思った。しかしながら、自費での渡航というものも困難であり、KUASU 支援室の存在意義は大きいと言わざるを得ない。

## 「ハイデルベルク・ストラスブール派遣 参加報告書」

京都大学文学研究科 修士1年 白仁田 俊

今回の研修は、修士課程における本学とハイデルベルク大学およびストラスブール大学、そしてシンガポール国立大学との間でなされる joint-degree program 設立の準備段階として、ヨーロッパの2つの大学を視察し、関係者と交流を図ることが目的であった。

プログラムの概要は以下の通りである。

ハイデルベルク大学では cluster という学際研究を推進する研究機関を視察した。Public Relation 部や財務部などの部署を訪問した後、cluster 長の話をお聞きしてから、cluster の subsection の研究者の話をお聞きした。それから、京都大学と cluster の間の調整業務をつかさどる coordinator を囲んで昼食会を催した。そして、ハイデルベルク大学東洋アジア学科の中にある日本学科の先生と学生の話をお聞きした。

ストラスブール大学では、まず日本語学科の Schaal 先生に大学の施設をその沿革とともに1つ1つ紹介して頂いた。次に、Schaal 先生引率のもとでパリとストラスブールにしかない、国立大学図書館 Bibliothèque Nationale Universitaire を訪れた。最後に日本語学科の修士1年の学生と交流をもった。

ハイデルベルク大学の cluster であるが、ドイツ政府が自国の学術研究の国際競争力を強化する Excellence Initiative という政策にもとづいて資金を出し、学際的研究を促進するために各地の大学に設けたものの1つで、cluster という機関は全国にあるそうである。ハイデルベルクには自然科学系と人文系の cluster が存在し、私たちが訪れたのは人文系の方で Cluster of Asia and Europe という名前である。私は、ドイツが学際的研究に力を入れていることに興味を持ち、人文系の学際研究に対しても支援を行っていることに感銘を受けた。Cluster of Asia and Europe は上で述べたように自前のオフィスを持っており、自分のところの学生も抱えているところからしてかなり独立性が高いと思われ、transculturality を合言葉にかなり組織だてで構成されている印象を受けた。

後に訪れた日本語学科の先生と生徒の話も大変興味深く、マンガやゲームは勿論のこと、日本の近代史を研究されている方もいることを知り、研究分野の幅の広さに驚いた。

ストラスブール大学は市内に大規模なキャンパスを構えており、あくまで私の感覚であるが、京都大学よりもそれぞれの学部や研究機関の建物が文理の区分にとらわれずに立ち並んでいるように思えた。

国立大学図書館は大変素晴らしかった。入口から入ったところのサロンは天井から光を採り入れる設計になっている。図書館の人の話ではこの設計は、1870年のフランスとプロイセンとの戦争で図書館が破壊される前のものを最近の工事で復元したのだそうだ。建物は現代的で電子検索システムが完備しており、非常に機能的であった。書庫にも入らせてもらったが、とても古い資料から最新の資料まで徹底した管理の下で保管されていた。

その後に訪問した日本語学科の学生との交流では、なごやかな雰囲気のもと話をする事ができた。私は外国語を学ぶことがいかに大変かを日々痛感しているため、彼らが日本語を話やすい雰囲気を作ることを心がけ、また積極的にこちらから話しかけるようにした。

今回の研修において一番得られた学習成果は、対人関係における積極性である。向こうのオフィスの方々に対して進んで挨拶をしたり、お話を質問をしたりすることで、良好な人間関係を構築するきっかけを作れたのではないと思う。また、両大学の先生や学生との間でつながりを作ることができたことも貴重な経験であった。

自身の語学力が未熟なこともあり、もっと内容の濃いコミュニケーションを図る目標を完全には成し遂げられなかった部分もあるが、個人的に外国語の習得に励む傍ら、こうして実践的に人とふれ合うことを通じて国際交流の進展に貢献していきたいと思う。

将来、博士論文を書くために海外に留学したいと考えているが、今度の研修でその思いがますます強くなった。世界には様々な研究機関があつて、多様な研究環境があることを肌で感じたことで視野が広がり、これから海外で研究に取り組む、もしくは海外の研究機関と日本にいながらにして共同する可能性を広く考慮に入れることができるようになった。

研修は終わったけれども、国際交流は一回きりではないと思う。今後も両大学の関係者とコミュニケーションを密にして、関係を継続的で強固なものにしていきたいと思う。そして、ハイデルベルク大学とストラスブール大学、そして今回は訪れる機会をえなかったシンガポール国立大学との間で、修士課程における joint-degree program が樹立され、さらには博士課程でもそれが成し遂げられるのを願いつつ、大学間の橋渡しをするための一助として、密度の濃いコミュニケーションを実現していければ幸いである。

## 「ハイデルベルク・ストラスブール派遣 参加報告書」

京都大学文学研究科博士後期課程 1 回生 蒲 知代

今回の派遣プログラムでは、ハイデルベルク大学とストラスブール大学の二つの大学を訪問し、現地の学生と交流することが最大の目的であり、かつ最大の成果であった。ハイデルベルク大学で最初に交流したのは、キエフ出身で言語学を専攻している男子学生と中国出身でメディア学に関心をもっている男子学生であったが、自己紹介のあと、私が名前のスペルを教えてほしいと頼むと、笑顔でノートにサインをしてくれた。ハイデルベルク大学の学生と交流するというのだから、知り合うのはドイツ人だと思い込んでいた私は、最初は少し戸惑ってしまったが、昼食に向かう道中、中国出身の男子学生と英語でコミュニケーションを交わすうちに、彼がハイデルベルクに来てまだ半年であることを知り、とても親近感が湧いた。また、昼食のあとに話しかけてくれた男性はドイツ出身の Ph. D.で、ナショナル・ミュージック、とりわけギリシアとトルコの音楽を研究しているようで、ハイデルベルクにはもう十年以上も住んでいることをドイツ語で話してくれた。そして、ストラスブール大学で出会った男子学生は、とても流暢な日本語で、彼の研究テーマである日本の妖怪について熱く話してくれた。さらに、学生ではなく先生だが、ストラスブール大学の施設を案内していただいた Sandra Schaal 先生は、私がフランス語を勉強して一年だとフランス語で言うと、ゆっくりとしたフランス語で「あなたは何を研究しているの?」と優しく聞いてくださったのも、大変嬉しかった。このように、今回の研修で使用した言語は英語・ドイツ語・日本語・フランス語の四ヶ国語であり、外国語を学ぶことが異文化交流においていかに大切なことであるかを実際に知ることができた。また、多様な言語を習得することによって、自分の専門(ドイツ語学ドイツ文学)の垣根を越えた学際的な異文化交流が可能になることを実感することができたという意味でも、今回の研修でドイツとフランスの二つの国を訪問できたことは大変有難かったと思う。

さて、今回のプログラムの中でとりわけ興味深かったのは、ハイデルベルク大学のアジア・ヨーロッパ研究クラスター *Cluster of Asia and Europe* を見学し、クラスターの仕組みとそこで実施されている教育内容について説明していただく機会を得たことであった。説明会は全て英語で行われたが、それは全く不思議なことではなく、クラスターで行われる授業が基本的に英語で行われるからであった。

説明会の冒頭では、このクラスターがドイツ政府の資金援助を得て 2007 年から始められた新しいプロジェクトであるということが強調された。そこからは、研究が資金のうえに成り立っていることに対する強い意識と感謝の念を感じ取った。また、説明会の中盤では「学際的な *interdisciplinary*」という言葉が繰り返されたが、クラスターが存在する意義もそこに集約される。というのも、クラスターで行われている研究プロジェクトは、統治と行政 *Governance & Administration*、公共圏 *Public Spheres*、知識システム *Knowledge Systems*、歴史性と文化遺産 *Historicities & Heritage* の四つの研究領域に分けられており、さらに仏教学 *Buddhist Studies*、文化経済史 *Cultural Economic History*、グローバル美術史 *Global Art History*、思想史 *Intellectual History*、映像・メディア人類学 *Visual and Media Anthropology* の五つの教授職の設置によって、「異文化(アジアとヨーロッパ)間の *transcultural*」研究が可能となっているからである。そして、研究プロジェクトの成果は専門書やジャーナルの形をとって随時公表されている。

また説明会の後半では、クラスターが若手研究者の育成のために提供している修士課程 *Master Transcultural Studies (MATS)* と博士後期課程 *Graduate Programme for Transcultural Studies (GPTS)* の教育プログラムに関して、引率のビヨン＝オーレ・カム先生から説明を受けることができた。MATS と GPTS の学生は、日本の学生と同じように授業を受け、*Reading Class* や *Cluster Colloquium* で発表・議論を行い、指導教官の指導を受ける。ただ、日本の大学との大きな違いは、クラスターという特殊な教育環境に学生が置かれることによって、「学際的な」かつ「異文化間の」研究が行い易くなっていることであり、これがクラスターにおける教育の長所であることは言うまでもない。(もちろん、日本の大学でも同様の仕組みが行われている場合もあるが。)

以上のように、今回の研修では海外で行われている先駆的な教育プログラムの一つを勉強させていただくことができた。私は半年後に交換留学生としてオーストリアのウィーン大学に留学することが決まっているが、今回の派遣プログラムでの経験を通して、できればドイツの大学でも少し学んでみたいとも思った。また将来、研究職に就いて大学の教員として働くことを目指しているため、今回の研修で学んだことを出発点として、海外と日本を結ぶグローバルな大学教育に貢献できる人材になりたいと考えた。

最後に、このような貴重な経験を享受する機会を与えてくださった、引率のカム先生、コーディネーターの平田昌司先生、指導教官の松村朋彦先生、支援室の向井さんと倉田さんに感謝の言葉を申し上げたい。また、今回のプログラム参加を通して知り合うことができた同じ文学部のメンバーにも、皆で協力して楽しい研修になったことを感謝したい。

## 「ハイデルベルク・ストラスブール派遣 参加報告書」

京都大学文学研究科修士2年 今井康貴

今回のプログラムでは、2015年3月21日～26日にドイツの Heidelberg 及びフランスの Strasbourg に8人の学生が派遣された。内容の重複を防ぐため、本報告書では3月23日午前に Heidelberg 大学内の Karl Jaspers Centre で行われた、同大学のクラスター (Cluster of Excellence “Asia and Europe in a Global Context”)の説明会の内容に焦点を当てる。同プログラムの他の日程については、他の参加者の報告書を参照されたい。

Heidelberg 大学のクラスターは政府主導のプログラムである Excellence Initiative の指定を受けて2007年に開設された。このクラスターは、当初は2011年までの時限的な部署として機能する予定であったが、現在はその成果が評価され、2017年までの助成金の給付が延長されている。

Heidelberg 大学のクラスターは “Asia and Europe in a Global Context” という名称で、その目的は学際的な視点を持って、文化交流の過程を明らかにすることにある。また、クラスターの研究では、ヨーロッパの大学で従来行われてきた研究に関する考えや手法に捉われず、世界各国の様々な文化圏の優秀な学生、研究者を集めることにより、アジアとヨーロッパを単なる「東西」という対立以上のものとして比較することに努めている。音声、映像などの様々な媒体を資料とした研究手法を確立しようとしていることも、このクラスターの特徴であろう。

クラスターに所属する博士課程の学生は、通常 supervisor と mentor が2人ずつ付き、3年間の指導を受ける。また、学生は最大で3年間の奨学金が支給されるなど、財政面での支援も手厚い。1年目は様々なテーマの授業に参加し、2年目にはフィールドワークを行う。3年目には、その結果をもとに論文の執筆や発表に専念する。2年目の終わりには、研究の経過報告をクラスターの委員会に対して行い、その評価によって3年目の奨学金支給の有無が決まるようである。

修士課程の学生は、以下の3つの分野の中から1つを2年間学び、研究することになる: Society, Economy, and Governance; Knowledge, Belief, and Religion; Visual, Media, and Material Culture。修士課程での2年間は4つの学期に分けられる。第1学期は、異文化研究、比較文化研究の主要なテキストを読み、基本的な考えを概観する。第2学期は、自身の研究テーマへの理解を深め、第3学期には、海外で勉強をしつつ、修士論文のための研究を開始することになる。そして、最終学期に修士論文を書き上げるというのが一般的な学生の2年間のようだ。

最後にこのプログラムを通して、海外でのアジア研究がどのように行われているかを初めて知ることができ、とても貴重な経験となった。また、当初の目的は将来、本大学と Heidelberg 大学及びその他の大学との joint degree プログラムの締結を促進させることであったが、説明会を受け、滞在を続けるうちに、自身の留学志向が強まったことは禁じ得ない。何れにしても、今後、両大学を含む複数の大学間での joint degree プログラムが成功することを祈るばかりである。

## 「ハイデルベルク・ストラスブール派遣 参加報告書」

京都大学文学研究科1年 今別府大介

3月21日から26日にかけてSGUの一環として企画されたハイデルベルク・ストラスブール海外研修に参加したので、それについて以下で報告する。私は、その中でもハイデルベルク大学におけるアジア研究のクラスターでカウンセラー・アシスタントを担当している方とワーキング・ランチを共にしたとき伺った話とその感想を紹介したい。まず、当クラスターで勉強したいと思った場合、まずはカウンセラーの方に経済的な面や研究分野について相談してもらえると、ということだ。こうした学生に対するケアもしっかりとしているため、不安を抱えたままクラスターでの勉強が始まってしまう、ということはないさそうである。とはいえ、このクラスターはアジア研究を中心としているため、そこで勉強しようと思う学生は自らの分野がいかに関わるかという点だけはしっかりと考えておいたほうが良い、ということである。次に、カウンセラーの方のお話を伺って私が抱いた感想としては、やはり語学の能力がドイツをはじめ海外の研究生活において必須であると痛感した、という点が第一にあった。私は、当研修に参加しようとするまでは外国語については読み・書きに比重を置いた学習をしていたのだが、やはりそうした生半可な知識ではネイティブの会話にほとんどついていくことができなかった。特に哲学や思想について勉強している学生の方々は、私のようにスピーキングをおろそかにしている人もいると思う。私自身、外国語で書かれた難解な書物を読み解くだけで十分だと高をくくっていたのだが、研究を進めていく上で当然海外の研究者とのコミュニケーションを必要になってくることを考えると、非常に危機感を覚えた。私は今回の研修では、他の参加者に助けられながら少しずつ会話に慣れていくことができたので、もっと実践的な会話やコミュニケーションの練習をしていれば今回の研修もより有意義なものであっただろうと少し後悔した。今後両大学へと留学したいと思っている方々は、もちろん私のような怠け者は少ないだろうが、外国語を話す・聞くという面も十分意識した上で日頃の学習に取り組むべきだと思われる。